

『愛玩』生活能力を欠いた一家と回復への期待

——安岡章太郎の「戦後」の始まり

アハマド・M・F・モスタファア

序

「神話」が砕け散る虚しさ

「戦争」というテーマは安岡章太郎の少年時代及び青年時代そして父親がなくなるまでの壮年時代を題材にした作品の多くに、背景として取り上げられている。そしてそれらの作品を大まかに分けると、「戦中の時代を書いたもの」と「戦後の時代を書いたもの」に二大別できるのではないかと思う。前者に該当する作品は、『宿題』（一九五二年発表・『文学界』）『悪い仲間』（一九五三年発表・『群像』）『むし暑い朝』（一九六一年発表・『中央公論』）『遁走』（一九五六年発表・『群像』）『相も変わらず』（一九五九年発表・『新潮』）『肥った女』（一九五六年発表・『文学界』）『青葉しげれる』（一九五八年発表・『中央公論』）『サアカスの馬』（一九五五年発表・『新潮』）『質屋の女房』（一九

九六〇年発表・『文芸春秋』）などであり、後者を代表する作品は、『陰気な愉しみ』（一九五六年発表・『文学界』）『ハウス・ガード』（一九五三年発表・『時事新報』）『ガラスの靴』（一九五一年発表・『三田文学』）『ジングルベル』（一九五一年発表・『三田文学』）『雨』（一九五九年発表・『文学界』）『サアヴィス大隊要員』（一九五四年発表・『新潮』）『海辺の光景』（一九五九年発表・『群像』）『軍歌』（一九六二年発表・『新潮』）『家族団欒図』（一九六一年発表・『新潮』）『愛玩』（一九五二年発表・『文学界』）などであると考えられる。後者の作品の中から、この論文では『愛玩』を取り上げ、安岡氏はいかにこの作品をもって自分の中の「戦後」をシンボリックに表現しようとしたかを探ってみたいと思う。

安岡章太郎の作品のほとんどは自分自身の自伝を題材にとり、それをほぼ忠実に語るものであり、誰の目から見ても、「私小説」的

な要素に満ちているが、「私小説」という評価の枠内におさまるものではない。『愛玩』やその他の多くの作品にはその深い想いや主張がシンボリックな形で表現されている。私は他に安岡章太郎の二つの作品を分析し、その中に含まれると思われるアレゴリーを取り上げた。この二つの作品とは、『宿題』と『肥った女』である。『宿題』を取り上げたとき、「父親の不在」というテーマに焦点をあてながら、特に戦争ドキュメンタリ映画上映の場面に出てくる数多くのアレゴリーを分析してみたし、また『肥った女』の論文⁽²⁾でも女郎の街が「幻想の世界」もしくは「非日常の世界」のシンボルとして象徴されたのではないかという読み方に立って論じた。同じように、『サアカスの馬』や『蛾』や『ガラスの靴』などの場合も、アレゴリーやシンボルが使われていると思われる。つまり、シンボルもしくはアレゴリーを使って「戦争」に対する自分の心中を述べるのは安岡章太郎のそのころの複数の作品の共通点といえよう。

安岡章太郎はこれらの一連の作品を通して自分の胸の奥深くに秘められたある想いを伝えようとしている。そういう印象がすこぶる強い。そしてその内容は安岡章太郎の「戦争」に対する自分の複雑な想いに他ならないと考える。

安岡章太郎は学徒兵として戦争の緊迫した空気を味わい、敗戦の苦さも味わった。これは私自身が少年・青春時代を過ごした状況と、国と文化と歴史は異なるものの類似なる部分が多く、そのような経

験から、「戦争」というものが安岡氏の文学世界においては如何にもとても大きなテーマであり、殆どの作品に奥深く根ざしているものでとても重みのあるものと充分認識した。

『愛玩』を四年ほど前にはじめて読んだとき、私は三〇年ほど前の第三次中東戦争の「終戦」の日を思い出した。

そのとき自分は小学校五年生の一〇歳だったが、その日の出来事は昨日のようにハッキリと覚えている。戦争が勃発して六日目のことだったが、その日の朝から夕方までラジオから流れてきた軍事声明の内容はたった一つで、「我がエジプト軍が攻防戦をあらためるため、シナイ半島からスエズ運河の西側へ撤退し防御線を固めようとしている」というのであった。私を含めて家族やまわりの隣近所もマサカと思ってラジオに耳を当てながら固唾を呑んでいた状態。

この戦争がはじまる前まで、新聞やラジオやテレビそして学校の先生もすべてが「ナセルや中東最強のエジプト軍の絶対勝利」の話を毎日のように何度聞かせてくれたことだろうか。私たち子供から大人までラジオから流れてくる軍歌と合わせて声を上げてどれほど歌ったことだろうか。しかしその六日目の夕方に、テレビの画面にナセル大統領が登場し緊急声明をしたことで、今までの「神話」が嘘のように一瞬にして砕け散ってしまったのであった。

当時四七歳の若さのナセル大統領の顔は七〇歳の疲れきった老人の顔にみえた。敗北そして辞任の声明を発表する前に、すでに私は

その顔を見ただけでその悲劇の真相を悟ってしまった。声明発表のときなぜかテレビ画面の調子が急に悪くなり、映像が斜めに歪んでしまった。親父が必死に幾ら調整のつまみをいじっても画面の映像は一向になおらない。これまで教祖様のように信じて愛しつづけてきたナセル大統領のあの歪んだ顔は、言い表せないほど私に大きな衝撃を与えてしまい、消えることのない深い悲しみを胸に植えつけられてしまったのであった。大統領の敗北・辞任声明が終わった瞬間、窓から暮れていくカイロの空を涙ぐんだ眼で見上げると、その空は対空砲から撃ち込まれ破裂した無数の砲弾によって真っ赤に燃え盛っていた。私はその日からあらゆることに對して不信感をいだきはじめ、そしてそれが私にとっての「戦後」のはじまりであった。そのときからまたなぜか両親の仲が悪化してしまい、家の空気は熱っぽく重苦しくなってしまった。これも私にとっての「戦後」を一層耐えがたいものに作り上げてしまったのであった。

しかし不思議なことに、私を含めて殆どの当時のエジプト人は自国の敗北の悲劇をただ嘆き悲しむばかりでなく、いつかそれが一種の滑稽さに変わってしまい、エジプト軍の圧倒的な敗北は沢山の小説のネタになった。言い換えれば敗北の悲劇を乗り越えるために、皆はそれを自嘲的に扱い批評したり笑い飛ばしたりしたのである。そのとき自分は、悲劇の極限に達するとそれが皮肉や滑稽にさえ変わってしまうと思うようになった。『愛玩』を読んだとき、以上述

べた思い出が三〇年間という深い溝を一瞬に飛び越えて眼の裏に噴水のように噴き出してしまったような感じであった。以上の個人的な体験もあって本論文では安岡章太郎の『愛玩』を取り上げようと思う。

状況や経緯などが違って恐らく安岡章太郎は「戦後」つまり日本の敗北の悲劇によって大きな衝撃を受け、支配階層をはじめ身の周辺のものや親までにある種の不信感を抱きはじめ、そして悲劇の極限に達したところでそれがある種の滑稽さや可笑しさに変わり、自虐的に自嘲的に沢山の作品を書き出すようになったのではないかと思われる。いわば、彼の作品は、自虐的、自嘲的な主人公の立場から、「時代」の不当さを笑いとばす批評をふくんている点に特徴があると思われる。そして、このような彼の姿勢は、肉親や家庭生活をモデルにした沢山の自作に一貫してみられるところである。

そして、『愛玩』を取り上げるには、より大きな理由がある。エジプト人やアラブ人は第二次世界大戦やその後の日本の社会や政治の行方に対してすこぶる興味を持っていて知りたがっている。アラブ人日本研究者の第一世代である私と数少ない仲間にもそれに応える義務のような気持ちがある。政治でもなく経済でもなく、文学を専攻する自分としては、その過程を語る日本文学、強いて言えば「戦後文学」と呼び得るものから代表作品を選び、紹介したいと考えている。そのひとつとして『愛玩』を選ぶに至ったわけである。

では「愛玩」という作品は、安岡章太郎が書いた作品、特に「戦争」を伏線的なテーマとしてもつ沢山の作品群の中でどう位置づけられるのだろうか。

I 安岡文学を形成する大きな要素としての「戦争」

序で述べたように、「戦争」というテーマは安岡章太郎の少年時代及び青年時代そして父親が亡くなるまでの壮年時代を題材にした作品の多くに、背景として取り上げられている。

1. 安岡章太郎は幼い頃から軍医を務めていた父の仕事の関係で、軍隊のある町を転々と移っていく。安岡が九歳になるまで四年間ほど父親の勤務先である朝鮮に留まり、一一歳のとき(つまり一九三一年)父と別れて母親と一緒に東京の赤坂区へ移る。彼は少年時代に六回もの転校体験をした結果、結局学校嫌いになってしまう。その傾向がずっと尾を引いて入隊するまで続くのであるが、勉強嫌いで学校をさぼっては不良仲間と一緒に色々な冒険をしながら、ところどころ戦争をそれとなく皮肉って言ってみたりする。それは、『宿題』『悪い仲間』『青葉しげれる』『サアカスの馬』『肥った女』『質屋の女房』『むし暑い朝』などの沢山の作品に見られる。

つまり、日本は戦争の緊迫した空気にあった最中、軍人であった父の絶え間ない転勤のおかげで安岡や母は、それに引きずられ振り回された。安岡は生活の安定を失った上、繰り返される転校のこと

で学校嫌いになり、仲間をつくることもできないので段々閉鎖的になってゆき、逆に母親の存在がそのころの自分の人生の大きな部分を占めるようになっていくわけである。そこからおそらく彼はそのような状況をもたらした軍隊という父の属するものに対して嫌悪感を抱くようになり、従って戦争そのものに対しても反発を感じたのではないかと思う。自分の小学校時代の勉強嫌いな様子を描いた『宿題』などを読んでいくと、軍人である父の「不在」が如何に影響して彼の心の中の孤独を増したことがうかがわれる。ところどころ「戦争」が彼の視界の中に入り込み、皮肉られているのは、以上に述べたような心境によるものではなからうか。

2. 「戦争」に対する安岡章太郎の複雑な心境を生んだもう一つの原因と思われる要素には入隊経験がある。戦局が日本の不利に動いていくなか、安岡は一九四三年一二月に第一回学徒兵として入隊した。そのころ、日本軍はすでにガダルカナル島を撤退していた。そして翌年の三月に彼は東京第六部隊に現役兵として入営し、ただちに満州第九八一部隊要員として北滿孫呉へつれて行かれた。その年の八月に彼は胸部疾患で入院した。ちょうど入院の翌日、彼が属した同部隊はフィリッピンへ移動したが、レイテ島では全滅してしま⁽³⁾った。一見して彼が病気になるたおかげで助かったというふうに見られるであろうが、仲間全員が戦死しながら自分だけ奇跡的に助かったことはとてもショッキングな出来事であり、彼のところに大き

な暗いかげを投げ落とした。この点について村松定孝氏は、「安岡章太郎の」同世代の多くの若者たちが戦争で散っていったことに対する、つまり死にそこなった悔恨と羞恥がつきまとっている。(中略) どうして不当な戦争で生き残ったことが悔いられたり、恥ずかしかったりするのか。(中略) これは戦中派にしか理解できない、口にしてはならぬ、言葉にできない辛さ」である、と言っている⁽⁴⁾。おそらくそれが戦争が終わってもずっと尾を引いており、安岡章太郎のこころの中に戦争のイメージを作り上げるのに大きく影響しただろう。したがって安岡文学においても決して無視のできない跡を残したはずである。

3・安岡章太郎は翌年、つまり一九四五年三月に内地送還になる。同年七月に、彼は金沢の陸軍病院で現役免除になったが、その後、東京の家は戦災で焼け、同年一〇月(終戦後)に、藤沢市鶴沼に住みはじめる。彼はそのころ脊椎カリエスになるが、医療費不足のため医者にはかからず寝たきりの生活になる。これが『愛玩』の背景をなす。そして体の調子のよいときは進駐軍へ労務者として働きに行く。これが『ハウス・ガード』『ガラスの靴』などの背景となっている。このように彼がまた脊椎カリエスになって長い間、闘病生活を送ったことがまた敗戦の状況と重なった。これもまた「戦争」に対する彼なりのイメージを作り上げるのに大きな要素として働いたであろうし、さらに彼の文学に大きな影響を及ぼしたに違

ない。

安岡や同世代の若者がずっと信じきってきた沢山の物事が敗戦によって嘘のように見えてしまったことは、まわりのすべてのもの、そして自分自身に対してまで、ある種の癒しがたい「不信」を抱かせてしまったと思われる。こうして安岡はその後ギプスのコルセットを胴に付け、数年間、動きの不自由な生活を送りながら、敗戦後の混乱した様々な状況をくぐり抜けながら筆を取って作品を書きはじめるわけである。言い換えれば、安岡は背中を患ってほとんど寝たきりの状態になったおかげで、逆にある意味の余裕を持って今までのすべてのことに思いをめぐらすことができるようになり、自伝的なスタイルで自分や自分の家族をモデルにした作品を書くことが可能になったのである。

4・もう一つ取り上げるべき要素は父親の戦場からの帰還とそれを伴った安岡の複雑な心境なのである。終戦の翌年、つまり一九四六年になると、安岡章太郎の病気が悪化してしまう。同年の五月に、軍医を務めていた父は南方(シンガポール)の捕虜収容所から復員した。しかし父の様子もおかしく、生活能力もなかった。別な言い方で表現すると、「父親にとっての『戦後』とは、敗戦によって生活の手段を失った元職業軍人の生活ということである」⁽⁵⁾。但し、父親の生活能力喪失よりもむしろ父親の「不名誉な帰還」の方が安岡章太郎にとって大きな衝撃だったのではないかと思われる。敗戦と

ともに、安岡氏は母親と二人で、知人の家などを何軒も泊まり歩いて暮らしたり、軍隊で患った病気でほとんど起きて歩くことさえ出来なかったり、あらゆる物資が不足して、生活の不安は戦時中の何層倍も大きくなった。しかし空襲がなくなり、軍隊もなくなったというだけでも安岡氏は「気が楽になり心がひらいて、何か手加足枷をはずされたような軽々とした心持になった」と書いてもいる。

このときまで安岡章太郎にとっては、本当の戦後の悲劇は実感されていなかったとも言えよう。父親の生存が確認され、日本への帰還は時間の問題だと安岡章太郎も母親も安心して安穏な日々を送っていた。父親が帰還したときのことを安岡氏は次のように語っている。

しかし、この異様なほど明るい気分は、ある日、突然、かき消された。父の帰還は戦争が終わったときから当然予期されたことだし、復員局からも事前に報せがあつて、母もそれなりの準備はしていた。しかし、その日、昼すこし前に玄関の戸のあく音がして、そこに階級章を剥ぎとつた軍服姿の父が立っているのを見たとき、私は突然、戦後見つけしてきた平和の夢が音もなく消え去るのをハッキリと悟らされた。シナ事変以来、十年近く不在だった父は、私たちにとって不意に訪れた客人のよ

うな存在だった。(中略) 父は明らかに以前の父ではなくなっていたのだ。

以上述べた四つの状況をもとに「戦争」というものに対する安岡章太郎のイメージが作り上げられ、作品中にそれが表現されていくのである。「愛玩」もまた、他の作品と同様に、そのイメージをシンボリックに結晶させて表した作品である。そして「愛玩」という作品は、以上述べた四つの要素の中で、彼に一番強烈なインパクトを与え、「戦後」のはじまりを形作つたと思われる父親の不名誉な帰還とそのだらしな無能力、また寝たきりの自分自身のだらしな無能力が最も強く表されている。

II 「戦後」の意味・「敗戦の後遺症」

ここであらためて安岡章太郎の作品群の中に表された「戦後」の意味を考えてみるなら、それはなによりも「敗戦の後遺症」であろう。そして「愛玩」という作品は、その意味で、安岡章太郎個人にとっての「敗戦の後遺症」であり、また「日本」にとっての「敗戦の後遺症」をたくみに表現していると思われる。それは「愛玩」の対象、つまり「ペットの兎」に象徴されているように思われる。

○父親の不名誉帰還と「戦後」のはじまり

まず、父親の不名誉な帰還や彼の生活能力喪失及びある種の発狂

をあらわす幾つかの段落を以下に引用する。

軍人だった父は獣医官だったのでどうやら戦犯にもならず、無事に南方から引き上げてまる四年になるのだが、あちらでの抑留期間中よほどおどかされたらしく、ぶん殴られることを警戒して、この鶴沼の家の門から外へはほとんど一歩も出たことがない。

また父は戦場生活の影響で自分に必要とするものは何でも宝物にしてしまいこむ。(中略) 欄間や天井や電灯のコードがクモの巣に覆われているのは云うまでもないが、その上に白い細いカビの花のようなものがまつわりついている。

この鶴沼海岸は波が荒く風が強いことで有名な土地だが、舞い上がる砂煙のなかで「ひえーッ、ひえーッ」と云うカン高いかけ声とともに、踊り狂う人のようにクワをふるっている父の姿は、やりきれない徒労の孤独と絶望とに僕を追いやる。こんなにして芝をはがしてみても雨が降れば必ず水びたしになって、何もとれない畑にしかならないと云うのに。

そしてまた、となりの部屋からは父と母とのイビキの合唱や、

たわけた寝言。……父は突如、馬のいななくような笑い声をあげたかとおもうと、「オキキモモ」と大きな声でさげふ。これはよくきくと「おチチのむ」と云っている。(中略) 最初僕は、戦地からかえってきた父のネゴトを、働きたくないための僕らに対する欺瞞の煙幕かと思っていた。だが滋養のために僕がドライミルクをのんでいるのを、そばでシンから欲しそうに見つめているところを見ると、そうではないらしい。

などのような段落が認められる。

○母親の「発狂」と「戦後」のはじまり

安岡章太郎にとってのもう一つの決定的で悲しい「敗戦の後遺症」は、母親の精神的な異常の発生だった。その経過は『愛玩』にはじまり、『海辺の光景』の母親のドラマティックな最期でおわる。『宿題』や『悪い仲間』や『青葉しげれる』など、つまり「戦中」を時代的な土台にした作品では母親は恐ろしくしてっかりしたイメージで登場する。「戦後」まもなくの時代を舞台にした『愛玩』では、それが変わり果てている。一見皮肉で滑稽に描写されているものの、その描写の隙間から安岡章太郎の悲しみや虚しさが感じ取れる。母親のおかしくなった様子を描いたふたつの段落を引用してみよう。

母は、父とちがって社交的であったから、こんな時代には大いに活躍するにちがいないと期待されていたのだが、サッカーの行商をやって忽ちしくじってしまった。イカサマ物を近所の人に途方もない値で売ってしまい、それ以来配給当番になっても疑ぐられる始末である。その結果彼女もまた、おそろしいインフエリオリティー・コンプレックスに陥って、あらゆることに全く自信を失い、何より困ったことに金銭の勘定がおぼつかなくなつて、毎日のちよつとした買物ものにも、商人に財布をわたして、その中から代金を受けとらせなければならぬ程だ。

人は茶箆筒の中からノコギリが出てくるのを見て驚くであろう。これは母が狂った連想でカッブシ削りとまちがえたためだ。

○安岡の病氣悪化と「戦後」のはじまり

一方、「僕」つまり安岡は戦争が終わつてから自分の病氣（脊椎カリエス）が悪化してしまい、『愛玩』では上半身をギブスのコルセットに固めて、敗戦の後遺症を背負つてまったく能力を失つた存在として描かれている。この三人の「敗戦の後遺症」をこうむつた様子をもつとも的確に描いたのは次の段落である。

こんな生活能力を徹底的に欠いた人間ばかり集まっている一家の混乱は、見た人でなければちよつと想像もつかないほどだ。

ここには正に一家三人の悲劇が浮き彫りにされている。このような一家三人の家へ、途方もない訪問者がやってくる。それは何より父親が連れ込んできたあの二羽の白い兎であった。父の計画は、獣医である自分の本職の技術を發揮し兎を飼つてはその毛を売つて一家の経済的ジレンマを挽回しようというのであった。父は「これであと半年すれば、月々八千円もうかるのだ」と期待をかけたなり、母はその父の発言を聞くと、たまげて歯のない口をあけて、まるで幼児が見たこともない大きな砂糖菓子をあたえられた顔をして、嬉しさのあまり笑いが止まらなかつたり、一方「僕」ときたら始めはベツトが嫌いで人の肌におしつけてくる獣を愛する人の気さえ分らないが、畳の上じつととまって眼を赤く光らせている例の兎を見たとなん思わず「可愛いな」と言つてまわりが明るくなったと思つたりして、三人はその訪問者に対して期待や楽しみを抱きはじめるのである。

しかしその家で兎が生活を送り出すと、先ず「僕」にとってはその楽しみや明るさの雰囲気はどこかへ飛んでしまい、火に油を注ぐような感じで自分の背中の痛みやかゆさがエスカレートしていくばかりであった。次はこの様子を表す幾つかの条である。

だが、ふと僕は畳の上に黒いコロコロした玉をみつけた。それは点々として部屋中いたるところに撒きちらされている。恥しらず、とはこのことであろう。ぴょんと一とはねるごとに、ポロリポロリと黒い玉を股の間からおとしながら、二匹そろってテレるでもなく、媚びるでもなく、ウサギはじつにシラジラしさそのものの表情である。馬鹿みたいに赤い眼をポッカリあけたその顔に、僕はわるい予感がした。

ウサギはひる寝て、よる暴れる。ガリガリ檻の木をかじる音や、床板をバタバタふみならず音（中略）、排泄物の流れる音、……これらの騒音が闇のなから不規則に、そして絶え間なくきこえてくるのだ。僕は夜半に、枕もとから駆けこんだ物凄くずう体の大きなネズミに足か頭かを齧られている夢で眼をさます。（中略）こんどは本物の魔物が僕を食いにやってくる。（中略）すると身体につけているかぎりのものが僕をガンジガラメにしはじめる。ギブスはずしてシャツをめくって、ぼりぼり背中を搔いてみるがムダだ。クスグッタさは奥の方へ逃げ込んでしまう。

騒音にかこまれた暗やみのなかで、不眠のため一層神経質に

なった僕は、自分の身体が内側と外側と両方からばらばらになって溶けてしまいそうな気がする。（中略）背骨のクスグッタさはますますひどくなる。そいつは混沌とした無秩序な部屋の、ホコリや、ぼろ布や、鼻汁だらけでほうり出している紙クズやそんなものから沼地のメタンガスのようにブクブクわき上っては、みな僕の身体のなかに這入りこむらしい。

搔けもしない奥の方にあるクスグッタさを我慢するために、僕はただ満身の力をこめて体を硬直させている。

それで、とうとうウサギどもは座敷で僕らと雑居するにちがい状態となってしまった。家全体はまさに家畜小屋だったが……

そのため家中に昆虫類、ナメクジ、ミミズのたぐいがおびただしく棲息することとなった。畳の上のそこにソオスや、みそ汁だらけになった虫が這っている。

これらの条を読むかぎり、いかに「僕」にとってはウサギの存在が大変な迷惑であり自分の病気を悪化させる憎い存在へと変わってしまったことがうかがわれる。

また「僕」から見ると、この憎いウサギのおかげで折角一時期父が一家を救うために見せはじめた頼もしい頑張りぶりが、いつか「僕」をイライラさせるばかりに変わり、父は気がおかしくなったように見えた程である。この様を表す幾つかの条を引用しよう。

鼻の穴に白いウサギの毛をからませて、呼吸のたびにそれがヒクヒクゆれているのも知らぬげに、前歯をうごかしながらものを食っているときなど、だんだん父の顔からは人間風なところが消えてゆくようだ。

皿にも鍋にも、あらゆる食器と云う食器には、食い残りの汁や、魚の皮や、茶のカスなどが入っている。父はすべての食物の栄養分析表を暗記しているので、頭の中にあるそれらのビタミンや熱量の数字が水といっしょに流れ出すのを惜しんで、どうしても食器を洗わせないのである。

おまけに彼はお膳で年中、眼をキョロキョロさせながら僕らが何を食べるのこすかを見張っている。

父のモクロミというのは、人間の頭髮のなかにある或る栄養分を抽出して、これをウサギに食べさせることによって、兎毛

の成長をうながそうとすることであった。(中略)ときどき独り言みたいにして、「床屋へ行けば髪はたくさんあるのだがなア」といつていた。(中略)夜など僕が寝ていると、どことなく陰険な眼つきになりながら、そばへよってこようとする傾向がある。

とうとうある晩、父はたまりかねたように自分の頭をゴシゴシ掻きながら云った。「おまえの頭、ずいぶん毛があるなア。」思わず、僕は両手で頭をおさえた。

またウサギが家に棲息しはじめることによって、母親の関心は全部その訪問者に注がれ、母親の可笑しい行動がエスカレートしていくばかりであった。母親は主人の発想に同意し、「家」を襲った貧窮という苦しい敗戦の後遺症から立ち直るために、彼女はそのウサギに期待を託すわけである。彼女はその目標を果たすため父と力を合わせて一生懸命に色々な種類の餌を工夫してはウサギにやったりした。しかしその必死な様子は「僕」の眼には、いつしかある種のヒステリックもしくは発狂にさえ映っていた。母親のそういった様子を表す幾つかの段落を引用しよう。

「これであと半年すれば、月々八千円もうかるのだ。」と云った。それをきくと母は「おっと、……」とたまげて歯のない口

をあけて、まるで幼児が見たことのない大きな砂糖菓子をあたえられたような顔をしていたが、やがて父の「一年間の収毛量がいくらで、それによって得られる毛糸が何ポンド、布地が何ヤード、……」と云った話が始まると、もう夢中でウレしさのあまり笑いがとまらず……

おまけに彼（父親）はお膳で年中、眼をキョロキョロさせながら僕らが何を食へのこすかを見張っている。……このことは年をとって台所仕事をメンドくさがる母の不精をますます助長した。実際母にとってこんなに都合のいい口実はなかった。茶碗や皿は汚れたままほうっておけるし、おかずはマズク味をつけるほどウサギの餌になるものがふえて、よろこばしいと云うのだから。

母はまた、子ウサギをみたたんから、あらたな母性をよみがえらせた。毛のムクムク生えた小さな動物を二六時中抱いて、胸をひっかかれるのかまわず、ふところへ入れて寝たりする。そして僕が赤ん坊だったころのことを、ウサギに話しかけでもするように、くりかえしくりかえし子供の言葉でつぶやいている。

こうしてみると、ウサギは最初、一家の救世主にすら見え、そこで両親はその救世主に敗戦の後遺症の回復の期待をかけ、力を合わせて育てていくという筋がはつきりうかがわれる。通常たかが弱い、小さい存在だが、こういった危機のときであればこそ期待をかけられ頼られる。敗戦の犠牲になって生活能力を失った家族三人は、もはや資産だけでなく気力や希望さえ失い、敗戦の後遺症に悩み果てていた。皮肉なことに三人は敗戦の後遺症を乗り越えるための気力や希望を、その小さな存在に求めようとするのである。しかし、しばらくすると、それが逆に裏目に出て、「僕」の病気がそのおかげで悪化したり、父もおかしな行動を起こし、途方もない寝言を発したり、母も気が狂ったような態度を見せて前より肥ってしまったりして、あげくの果て父も母もウサギにほとんど顔まで似てきてしまう。そして「家」といえば、ほとんど「無秩序」の状態に変わってしまう。つまり「敗戦の後遺症」がさらに深刻な状態になってしまうのである。

III 「愛玩」・自信と希望の回復

そしていよいよ一家の深刻な状態のクライマックスがやってくる。折角皆がいろいろな犠牲を払ってウサギを繁殖させ、いよいよウサギを売って甘い汁を吸おうとしたのだが、ところが、こんどはウサギの毛皮が流行らなくなり、仕方なく途方もなく安い値段で仲買人

に売らなくてはならなくなってしまう。一家全員の努力は一夜にして水の泡同然に挫折してしまうのである。「戦後」つまり「敗戦の後遺症」を絵に画いたような、なんとも虚しい状態が訪れるのだ。仲買人が家へやってくる、もはや邪魔で「無用」なウサギに対して「僕」は、「僕にとつては、そんなことはどうでもよかった。いまは何を措いても、この無用の長物を整理してしまふ必要がある。うまく料理してくれるなら僕自身が食べたくさしつかえないところだ」と思ったり、一方母親は、

まい日買うオカラのために着物を売ってしまった、とことごとくにグチをこぼした。彼女には絶えず、畳の上を這っている獣がモグモグと着物を食っているところが見えるらしかった。以前には、こんなにハッキリとシヨールや手袋を吐き出しているところが見えていたのに。……「チュウ、チュウ」と云う鳴き声に交って、いまは老婦人のヒステリックな声がしょつ中きこえる。「まあ、また、こんなところにオシッコをして。」

と、一刻も早く、この役立たずの嫌でうるさい小さな生き物を厄介払いにしようと思う。ウサギを買いに来た仲買人もこのウサギたちを見下げて小馬鹿にするばかりであった。彼は、ウサギ一匹を背中の皮のところから摘んで宙につり上げながら言った。

しろうとは、みなひっかかるですよ、これに。(中略) 誰でも最初は馬か牛をほしがりますが、それが買えないのでブタで我慢しようと云うことになる。ここまではまあいいが、これも買えないとなると次がウサギだ。(中略) まあだんなも気を附けなさい。ウサギなら食えもするがモルモットとくると食えないからね。……もつとも、このアンゴラでエやつは食って、うまい肉じゃねえが。

と。しかし背中⁽⁷⁾の皮からぶら下げられたウサギは、自分が小馬鹿にされていることが分かったかのように馬鹿力を発揮してもがきだす。ウサギは突然虚空に肢をふんばると、仲買人の腕に噛みついた。これは「僕」をはじめ、父も母もびっくり仰天した。「僕」は思わず「もつと噛め」ところにつぶやく。

この段落には注目すべきだろう。なぜなら、ここには、安岡章太郎の他の作品、たとえば『サアカスの馬』や『蛾』のいくつかの段落に酷似しているからだ。まず『サアカスの馬』⁽⁷⁾の場合は次の段落がある。

あの曲った背骨をガクガクゆすぶりながらやってくる。鞍もつけずに、いまにも針金細工の籠のような胸とお尻とがバラバ

ラにはなれてしまいそうな歩き方だ。……しかし、どうしたとか彼が場内を一と廻りするうちに、急に楽隊の音が大きく鳴り出した。と、見ているうちに馬はトコトコと走り出した。

(中略) おどろいたことに馬はこのサアカス一座の花形だったのだ。人間を乗せると彼は見ちがえるほどイキイキした。(中略) あまりのことに僕はしばらくアッケにとられていた。けれども、思いちがいがハッキリしてくるにつれて僕の気持は明るくなった。(中略) 僕はわれにかえって一生懸命手を叩いている自分に気がついた。

また、『蛾』⁽⁸⁾では次のような段落がある。

春吉氏(医師)がボール紙の筒を私の耳にあて、懐中電灯で誘導すると、まるで凍をかむより簡単に、長さ二三分の小さな蛾が飛び出したのである。どうせのことに、それがヒラヒラと飛びつづけて窓から天に昇ってくれば、まだよかった。……しかし、蛾は急に明るいところへ出たためか、とび出すや否や床の上に落ちた。(中略) そんな話を退屈な思いで聞きながら、ふと足もとを見ると、蛾は灰色の翼を重そうに垂れて、それでも脚をときどきヒクヒクと動かしている様子であった。

以上の二つの段落に、共通するポイントは、これまで弱そうで無力そうでどう仕様もなく思われた存在が急に逆転し、驚くほどの元気のよさや生命力を発揮するということである。また、そうされることによって語り手は、それまで馬や蛾を見損ねていたことに気づき、その弱そうな存在を見直し、この中で応援し励ますようになる。

『愛玩』の場合も同じことが言えよう。それまでうるさく、無用であり、さらには自分の体に悩みをもたらしさえするウサギが、小馬鹿にされた挙げ句に、急に踏ん張りだして想像を絶するほどの生命力や根性を発揮するのである。『蛾』の語り手が自分の耳の奥に三日以上住み着いた憎い蛾が、出てきたときに蛾のしぶとさや生命力に対して同情し感動したとき、そして憎たらしいウサギが仲買人の手を噛んだとき、おそらく語り手のところの中では自分自身の姿が馬や蛾や兎の姿と重なり合い、弱者で負け犬で自信喪失のどん底に陥っていた自分にも救いがあるときと、自信を取り戻して、気力や希望を回復するのである。結局ウサギは、「敗戦の後遺症」に悩まされ、病気や不名誉や狂気そして貧窮の餌食になり、自信喪失をし、生活能力を失った語り手一家に気力を取り戻させ、希望を回復する大きなエネルギーを与えてくれるのである。

IV 日本国民の戦後回復・日本精神發揮への期待

仲買人はウサギに噛まれると、彼は反射的にウサギに自分の怒りをぶつけて「ちくしょう」と叫びながらウサギをふりまわす。そして、その頭を縁側の柱にぶつけてしまう。その瞬間、骨の割れるような物音がした。普通ならそのような小さな生き物がその衝撃でひとたまりもなく死んでしまうのであるが、まもなく、ウサギは何も見えないような赤い眼をまるく開けて「僕」たち三人家族の方を見ていた。ウサギの眼はそのとき、まるで三人に、「おれは死なないぞ、君たちも頑張れ」と訴えたような感じに語り手には映ったのではないか。次の段落では、仲買人がウサギたちを次つぎに竹籠の中へ詰め込み、自転車に乗って庭の門へ向かっていく。そして最後の段落は次のように書かれている。

籠はふたを閉じたうえにホンビキがかけられた。けれども竹の編み目からは白い毛がはみ出して、それ自身生き物のように動いていた。(中略) 不思議にそれだけが、けっして腐らず、いつまでも生き残っているウサギ専門の飼料の、ジュットクンウとリュウセツナとがツルや葉を思いきりのぼしている庭の畑の彼方に、門の方へ消えて行く仲買人の自転車を、僕たち親子三人は、おたがいに一と言も口をきかずに見送った。

この条からは、次のようなことが読み取られよう。

1. 竹籠の編み目から靡くウサギの白い毛は死におもむく、にもかかわらずしぶとく、明るく生き抜こうという合図であるかのように感じられるだろう。

2. 「僕」は、父がおどり狂う人のように歛をふるって畑を耕し、ウサギたちの餌になる草を植えようとしていた姿を、はじめは「やりきれない徒勞の孤独と絶望」というふうにしか見ていなかったが、その草だけが「けっして腐らない」と思ったことは、戦場からの不名誉の帰還をした父の「敗戦の後遺症」からの回復への努力が、けっして水の泡のようなものだったわけではなく、明るい未来への希望につながるものにしたことを示しているよう。

3. つまり、これまで親子三人の間は、長い戦争中やその敗戦後まで互いにいろいろな複雑な感情が入り乱れ、そのせいか、あきらめや自信喪失や反発などの想いに悩んでいたが、ウサギが三人の生活へ飛び込むことよって三人はそのおかげでまともになり、家族の絆をしっかりと確かめ合い、そして「敗戦の後遺症」から立ち直る希望や勇気や根性を持つことになる。

以上が短編小説『愛玩』という全体のモチーフをシンボリックに示す場面である。しかしこの小説にはそれ以外にもシンボリックな記述が幾つか拾える。

ウサギは「チュウ、チュウ」と云って鳴くのである。この鳴き声をきくと僕はなんだかガッカリする。……陛下のお声をはじめてラジオできいたときのような、ある空しさがやってくる。

そして、

あんなに重そうな音をたてて暴れるくせに、何だってあんなタヨリない声で鳴くのだろう。

と、「僕」が感じる条である。

私は先ずこの文章を読んで自分の記憶に眠っていたあの三〇年ほど前のナセル大統領の敗戦・辞任声明が亡霊のように蘇ってきて、安岡章太郎にとっての天皇陛下の頼りないお声の弱さと私にとってのナセル大統領のテレビに移る映像の歪みが重なり合って一層以上の文章のインパクトが強烈なものとなったわけである。ただし、安岡章太郎の「敗戦」の強烈な印象が聴覚的なものであったところに對して、私の印象は視覚的なものであったということが言えよう。

ここで安岡章太郎が敢えてこの小説の題に付けた「愛玩」という言葉の意味が垣間見えるような気がする。「ウサギ」という小さな生き物が日本国民の「精神」そのものをシンボリックに描いている

ようにさえ感じられはしないだろうか。

付け加えて、ここで想像されることは、父親が最初にウサギをわが家へ持ち込んだのは、その毛皮を売って一家の経済ジレンマを乗り越えようと計画したからであり、ウサギはあくまでも「手段」としてしか思っていなかったことである。つまりウサギは「愛玩」の対象つまり「ペット」として飼われる存在ではなかった。それなのになぜ安岡章太郎はこの小説の題に「愛玩」つまり「ペット」という表現を与えたのだろうか。むしろそこに安岡章太郎の意図が隠されているのではなからうか。手段としてではなく、むしろ家族三人の愛情に包まれて大事に育てなければならぬ「ウサギ」とは、何の「シンボル」であろうか。

『海辺の光景』では、父が家の庭で鎌をふるって畑仕事をしたり鶏を飼ったりして家の経済的な危機を乗り越えようと思っただけという話が、長々と語られている。しかし『海辺の光景』には、「ウサギ」の記述は出てこない。しかし、『家族団欒図』にはアンゴラの話が出てきており、あるいは父親は実際に兎を飼ったことがあったかもしれない。では、一体なぜ安岡章太郎は「愛玩」で「鶏」ではなく「ウサギ」こそにこだわる必要があったのだろうか。また「アンゴラ」であれば様々な種類の様々な色があるはずだが、特に「白い」ウサギにこだわる必要があったのか。

小説のはじめの部分と終わりに近い部分に「ウサギ」の描写が表

れる。まずはじめの部分では、

馬鹿みたいに赤い眼をポッカリあげたその顔に、僕はわるい予感がした。

そして、終わりに近い文章は次のように書かれている。

仲買人はウサギをふりまわすと頭を縁側の柱にぶっつけた。

(中略) ウサギはそれでも死んだのではなかった。何も見えな
いような赤い眼を、まるく開けて僕らの方を見ていた。

この両場面におけるウサギの眼の表情が対照的で一八〇度違って書かれている。ばかみたいに赤い眼をほつきり開けたその頼り無い顔から、見くびっていたその小さな生き物の眼が今度は真っ赤に燃えて真剣にみつめる顔に変わっている。シロイ兔にアカイ眼、この取り合わせは「日の丸」を思わせるのではないか。そして、この眼の描写は小説の内容からいっても「哀願」ともとれる。そのようにいくつかの意味が重ねられたシンボルとして、ウサギの赤い眼を読むことができるのではないか。

もしかしたら、主人公の「僕」を含め家族三人、つまり日本国民が「ウサギの大切な愛らしいその赤い眼」、つまり「赤い日の丸」

に自分たちの切実な願いを託し、たとえ小さくか弱くとも、それを信じて一刻も早く自分たちを敗戦の後遺症から立ち直らせ、明るい未来に向かうことを約束するものとして、この白いウサギは書かれているのではないか。つまり、この「ウサギ」という小さな生き物が、それ自体が日本国民の「精神」のシンボルである「日の丸」を象徴するかのよう感じられるのである。

安岡章太郎は戦争のことを皮肉り、いろいろと滑稽に取り上げて書いてはいるが、戦争中から大日本帝国の指導部の姿勢や戦争そのものに対して皮肉で滑稽な想いを抱いていたとは限らないのではなからうか。彼が天皇をはじめ軍部や古来の日本を支えてきた「精神」、そして自分自身の「自信」に対して彼はある種の癒しがたい「不審」を抱いたのは、敗戦をきっかけにしてであり、そしてそれが「敗戦の後遺症」という形に変わっていったのではないだろうか。彼が腰に付けたあのコルセットの中で何年も背中をかゆく蝕んだあの「虫」が、彼の中にある文学才能をくすぐり刺激を与え、そして、それ以後小説が書きはじめられたのではないだろう。

『愛玩』における家族はまるで「日本国民」を象徴したもので、そしてその家の「無秩序」は、敗戦後日本を取り巻いた無秩序状態もしくは日本国民の精神的な迷いや乱れを象徴し、その混沌の中へ引き入れられる「ウサギ」に、本来あるべき日本人の精神力が託されていると読むことができるだろう。とすれば、「家」に踏み込んだ

仲買人は、「進駐軍」に見立てることができかもしれない。確かにウサギが「家」に住み込みはじめたとき一家三人に大きな迷惑をかけ混乱を引き起こしただろうが、最後に同じウサギのおかげで一家三人は一体となり、無秩序の状態になった「家」の秩序回復に向けて立ち直る。これは「日の丸」、つまり日本精神を強調したあげくに敗戦の悲劇を味わわねばならなかった日本国民が、それでも「日の丸」を信じ、そのもとで団結し、敗戦の後遺症を挽回しようとする意味にも通じるのではないか。換言すれば、「愛玩」は日本国民に戦後からの早期回復、つまり「敗戦の後遺症」からの立ち直りを促し希望を与えるものへと、その位置転換をしているのではないか。この点に作品『愛玩』の神髄があるのではないかと私は考えるのである。

注

- (1) 論文「安岡章太郎文学における実父「章」の人物像と安岡の戦争観との関係・『宿題』の場合」・カイロ大学日本語・日本文学科紀要「日本・ことばと文化」・第二号・一九九七年発行
- (2) 論文「『肥った女』・戦時下を生きる都会の若者たち」・『中京国文』・一九九八年三月発行
- (3) 「鑑賞日本文学」28・安岡章太郎・吉行淳之介・角川書店
- (4) 「安岡章太郎の戦争体験」・村松定孝・『国文学 解釈と鑑賞』一

九七二年二月号

(5) エッセイ「父の酒」・『安岡章太郎随筆集』8・岩波書店・一九九一年一月発行

(6) 同右

(7) 『海辺の光景』・安岡章太郎・新潮社（新潮文庫）・一九六〇年四月発行

(8) 『質屋の女房』（『家族団楽図』）・新潮社（新潮文庫）・一九六一年七月発行